

<http://grimreaper.is-mine.net/>

復讐代行

Bullet of the Revenge

著:射月アキラ

「復讐代行やつてるものなんですが、ちょっとお時間よろしいでしようか」
玄関先で一風変わった自己紹介をしてくれたのは、二十代に入つたばかりといつたところの若い男だつた。

カレンダーをめくつてからにわかに涼しくなりはじめ、気持ちと服装を切り替えなければすぐに風邪をひいてしまう季節が到来したことだ。

気持ちが浮かれやすい春だとか、暑すぎて頭がおかしくなりそうな夏だとかならばまだ分かるが、秋の季節に不審者が増えるという話はあまり聞いたことがない。となれば、目の前の青年は年がら年じゅうこんな調子なのだろうか。

復讐代行。

物騒極まりない言葉を、浄水器やら怪しげな教材やらを売り込む訪問販売のようさらりと言つた青年から、底知れない気味の悪さを感じる。売り込んでくるもの以外は全て普通と言つて差し支えないのに、唯一の異常が浮きあがつて強く主張している。

「あんまり大きな声では宣伝できない稼業ではあるんですけども、なにぶん開拓はじめたばかりの分野でして。ニーズを探りながらやつてる状態ですから、興味がなければすぐに仰ってください。ええ、たとえば」

呆気にとられた僕の前で、青年は笑顔を浮かべたまま言葉を続ける。

「殺したいほど憎い相手がいない、ということでありましたら、すぐに帰りますので」

自称・復讐代行の青年は、ヴァージルと名乗つた。

普通の名前だ、と指摘すると、

「まさか復讐者アグエンジャーと名乗るわけにもいかないでしょう。呼びにくいですし、外で呼べないです」

存外、普通の理屈で返答された。

仕事がアウトロー（というか、アンダーグラウンド）なだけで、中身は一般人と変わらないのかもしれない。言葉や常識がある程度通じる相手であること

を確認することができて、とりあえず一息つくことができた。

ヴァージルに居間の椅子をすすめ、僕はキッチンに入る。来客用に常備している茶葉などは特にないが、外れも当たりもしない市販のティーバッグで済ませることにした。砂糖とミルクが必要か問うと、否定の返事。

それ以上の配慮はいらない、とばかりにヴァージルは言葉を連ねる。

「しかし、驚きました。まさか本当に殺したい相手がいるとは」

発言に、むしろこちらが肩すかしをくらう。自信満々、というべきか、当然のよう営業してまわっている様子だったから、なにか根拠があつて訪れてきたと思ったのに。

「いやあ、そんな面倒なことはしてられませんよ。だいたい一〇軒まわらない内に誰かしらに通報されちゃうんで、いろんなところを点々と、しらみつぶしに」

そつちの方が面倒なんじやないか、とも思えるが。

というか、通報されても構わず、いちいち訪問販売の真似事をしてまで復讐代行なんて稼業を當むのはなぜだろうか。ただの遊びと考えるには、少し被虐趣味すぎる。営業なんて好まない人の方が多いのに。

他愛もない話をしている内に湧いた茶を入れ、僕は居間に戻る。

色気も素つ氣も変哲もないマグカップに入った安物の紅茶を、ヴァージルは文句ひとつ言わずにひとくち含んだ。嘘なのか本当なのかも分からぬ、「しみわたりますね」という感想。ここへ来るまでに何軒まわったのだろうか。

僕が紅茶に口をつけたのを見計らつて、ヴァージルは「さて」と話を切り出した。

「復讐代行の件ですが」

知らず、背筋がのびる。

僕だって、別に遊びや冗談でヴァージルを招き入れたわけではない。一応常識が通用する相手であることは判明したが、そうでなければただの不審者だ。言つてることからして物騒だし、下手をすれば殺されることだつてありうる。

復讐代行などという職（のようなもの）が本当かどうかは分からぬが、どちらにしろ武器を持っている可能性は捨てきれないのだから。

しかし、それでも構わないと——金だけとられて復讐は果たされないと、結末であつても、最悪自分の命だけが奪われるという結果であつても、まつたくもつて構わないと思うだけの相手が、僕にはいた。

「グレッグ・ブリュー」

僕が告げた名を、ヴァージルが繰り返す。

「聞き覚えがありますね。九人も殺した殺人鬼で、証拠は十分だつたが精神異

常と認められて今は病院に入つてゐるんでしたつけ」

肺か、そうでなければ胃が焼けただれそうだつた。

名を述べただけでも、じりじりと足の銃創がうずく。

太い血管を避け、骨にも当たらないよう細心の注意でもつて僕を殺さなかつた男だ。焼けるような痛みも、燃えるような恨みも、全てはあのケダモノによつて与えられた。

精神異常？ 笑えない冗談だ。

確かにやつの精神は異常だが、それはこの世に存在してはいけない異常だ。

精神病院の入院患者と同列で扱つていいシロモノじゃない。

「しかし、なかなか面倒な標的ですね」

言つて、ヴァージルは紅茶をする。

確かにそうだ。病院に凶器を持つて侵入するのはあまりにも難しいし、それが連續殺人犯のいる精神病院であればなおさら難易度は跳ねあがる。

僕が自力で復讐することを諦めたのは、射撃場に通つても上達する気配のない銃の腕が原因でもあるが、そもそもとして命を狙うこと自体が難しい状況にあることが大きい。

さすがに、無理か。あるいは、金でも積めば解決するだろうか。

悪い方向へ転がり始める思考を遮るように、ヴァージルは口を開いた。

「可能ではあります。——あなたに苦しんでもらうことになつてしまいますが

マグカップを持ち上げようとした手が、途中で止まつた。口をつけることなくテーブルに戻るカップに一瞥することなく、ヴァージルは一言断つてからジャケットを広げた。

ジャケットとインナーの間には、やはりというべきか、ホルスターが挟まつていた。わきの下に収まつてゐる拳銃を——撃つつもりなどない、と主張したいのか——つまむようにして持ち上げ、テーブルの中央に置く。

細やかな装飾が美しい、古風な回転式拳銃だった。そもそも色からして通常の鉛色からかけ離れた黄金だ。グリップは落ち着いた色調のベージュ。瀟洒で華奢なアンティークは、人を殺すという役割に特化しているとは思えない。博物館か美術館の展示品がお似合いだ。

怪訝そうな顔になつたであろう僕の感情を読みとつたのか、ヴァージルはまたひとつ、不可解な言葉を口にした。

「魔法銃、というものをご存知でしょうか」

復讐代行の次は魔法銃ときた。

映画か何かの話のようすら思えてきた。グレッグ・ブリューを思い出しさえしなければ、報酬を支払ったあとに詐欺であることが判明しても、笑つて許してやろうという気にもなつてしまふだろう。

僕の内心を知つているのかいないのか、あるいはそんなものには興味すら持つていなかの、ヴァージルは解説を始める。

「魔法弾と共に扱われるものです。魔法弾には人の意志をとどめる効果があり、魔法銃はそれを増幅して撃ちだす能力があります。殺意であれば確実な死を、保護欲であれば絶対の守護を。恨みは殺意と同列で扱われることが多いですが」 続けて、ヴァージルがジャケットから取り出したのは、銃と同じく黄金色の薬莢に入った弾丸だ。一見するとなんの変哲もない実包だが、底部——擊鉄に叩かれる部位に赤い石が埋め込まれていた。

無機物であるはずなのに、血の抜けきつていらない肉塊のような生々しい光り方をしている。

「いかがでしようか。この魔法弾を握りしめた状態で、一時間もグレッグ・ブリューのことを思つてくだされば結構です。死ぬ場面だと、自ら殺す場面でも構いません。恨みが強くなるというのであれば——思い出したくない場面でも」

それで本当にやつは死ぬのか。

問い合わせた僕の声は、自分でも驚くほどに荒々しかつた。他人に八つ当たりするような愚行は、僕だって本当は犯したくないのだが。

「必ず」

ヴァージルの答えは、明瞭で簡潔だつた。

「復讐を代行するのは、私ではなく弾丸です。そこに込められた思いが本物であれば、弾丸は望み通りにすべてを代行してくれる——そう思つてくれて構いません」

目を伏せる。実包についた赤い石に、どうしても視線が吸い込まれてしまう。欲望が頭をもたげた。ヒトの形をしたケダモノを、届かないと思つていた存在を、殺せる。

しかし同時に、記憶の奥底に植えつけられた恐怖心が拒絶する。もう一度と、あれと関わりたくない。たとえ思い出すだけであつたとしても、直接会うわけなくとも、近づくこと自体に意識が警鐘を鳴らしている。

頭も体も固まってしまった僕に、ヴァージルはあつさりとした口調で続けた。「答えは今すぐでなくても結構です。魔法弾の準備が完了するか、魔法弾を見ることがすら嫌になつた場合はこちらへ連絡を。——弾は、渡しておきますので」

2

テーブルの上には、ヴァージルの残した一つの実包と、一枚の紙切れが残つていた。

重い頭を振り、無理やりに視線を反らす。どんなことを言われても、どういう風に考えても、今は「復讐」という言葉を思い出したくなかった。

ヴァージルが去つてから、日が沈んで昇るだけの時間が過ぎている。夜更かしをしたつもりは全くないのだが、寝不足特有の体のだるさが残つていた。

眠りが浅かつた。悪夢を見ては目を覚まし、もう眠りたくないと思いながら睡魔に襲われる。そんな一晩だつた。

グレッグ・ブリュー。

あの男の夢だ。

目からは殺人鬼の薄ら笑いが。鼻からは血と硝煙の匂いが。右足からは激痛が。両手からは体温を奪われそうな金属の冷たさと、想像を上回る銃の重さと——どうしようもない震えが。

夢を見ているときの恐ろしさもさることながら、なによりもつらいのは、震える四肢を抑え込むようにしてベッドで丸くなつて目が覚める、あのやりきれなさだ。

これはきっと、いつまでも続く。あんな出来事を忘れるなんて、僕には想像することすらできない。

殺人鬼が死んだところで、それは変わらないだろう。

ため息を吐きだす。復讐代行なんていう蜜に釣られるのがバカだつたのだ。そんなことをしたつて、なんの意味もない。僕の記憶は消えたりしないし、問題はなにも解決しない。

用事を済ませて、気分が落ち着いたら、ヴァージルに連絡を入れよう。僕はもう二度と、あの男を自分から思い出したくない。

少し鮮やかすぎただろうか。

墓石の上に花を供えるとき、そうやつて自問するのが癖になりつつあつた。整然と並んだ石板の中の、同じファミリーネームが彫られた三つの墓だ。父と、妹。父は一〇年前、母と妹は七年前の日付が並んでいる。

母は病で。母と妹は鉛玉に倒れた。

毎年秋になると、花屋で適当に見繕つたマリーゴールドを母と妹にささげるのが習慣になつてゐる。どうあつても目をひく、鮮やかなオレンジの花弁。へたに色の混ざつたものよりも、紙で作った花飾りのような橙一色の種を好んでいたことだけは、覚えている。

庭で花をいじつていたのはもっぱら母と妹で、僕と父は花壇に近づくこともほとんどなかつたように思う。だから、父の墓石に乗せたのは、ここにあつてもなんらおかしくはない真っ白な花だ。手向けの花としてはポピーが最適なのだろうが、あいにく今は季節ではない。

手に残つてしまつたマリーゴールド特有の香りを気にしながら、目を閉じる。涼やかな風が通り過ぎていつた。どの季節でも緑を失わない芝生と、花束を包む包装紙が揺れてたてる音が心地良い。それ以外の音はほとんどない。静かだ。

墓地の静けさの中にいれば、大きな感情の揺れに脅かされることがなかつた。恐怖も、怒りも、悲しみも、沈黙にとけていく。死者の集まる場所で、僕も半分だけ死者の仲間入りをする。死ぬまで逃れられない呪縛から、一瞬だけ解放される。

深呼吸を三回もすれば、朝に沈み込んだ気持ちは元通りになつていて。荒れていた水面が、ガラスのような平坦さを取り戻したように。

これが不自然な状態であることは、重々承知している。けれど、僕が生きていくためには、荒れた心を静かにする必要があつた。荒れることも大切だし、動かないことは不自然だが、あまりに荒れすぎると日常生活に支障をきたす。頼る相手がいない僕は、一日中塞ぎこむなんていう日が三日も続いたら終わりなのだ。社会的にも、経済的にも、もちろん肉体的にも。

だから、何事もなかつたように——何事もないように、心を止める。なにも感じない。なにも思わない。なにも考えない。これが理想だ。一瞬で楽になれ

る、最高の方法だった。

凧いだ心に、ざわりとさざ波がたつ。左からの足音だ。

まぶたを上げ、左方へ視線を移す。芝生の上、墓石の間に立っていたのは、気の弱そうな壮年の男だった。よれよれのダークスースに、白い花がよく映える。似合っているとは言えないのが、少し残念なところではあるが。

「すみません、お邪魔してしまいました」

頭を下げる男に対し、僕は首を振つて応える。

確かに、コツカーと名乗った殺人課の刑事だ。デスクワークの方が似合いそうな風貌ではあるのだが、その実力に関しては否定することができない。グレッグ・ブリューの事件を担当し、有力な証拠を抑えたのは、コツカーの眼力によるものだと伝え聞きもした。

おそらく、その事件を忘れてはいないのだろう。コツカーは頭を下げてから、手元の花を一輪ずつ母と妹の墓石に手向けた。残る花は七。グレッグに殺された被害者の数と一致する。

「一輪、足りませんでしたね」

ぼそりと言つたコツカーの言葉を飲み込むのに、時間がかかった。理解してから慌てて否定する。

父の墓を指して言つてゐるのだ。担当事件の被害者は増え続けてゐるだろうに、過去の被害者に花を手向けてさらに親戚にも……なんてやつていたら、金と時間が全てそつちにまわってしまう。

やはり、殺人課に属する人間としては優しすぎるのではないか。グレッグを捕えた、という点においての恩人なのだから、死者に金をまわしすぎて破産なんてことになつてほしくはないのだが。

「ああ、大丈夫です。……きちんと犯人を捕まえられた人には、それで手向けど思うようにしていきますから」

コツカーの言葉が、ちくり、ときた。

静かだつた心がにわかに荒れはじめる。コツカーは当時、裁判に「負けた」と評した。求刑通りの判決にならなかつたどころか、グレッグ・ブリューに与えられたのは刑罰ではなく治療だつたのだ。

完敗、と言つて差し支えない。

よほどいい腕の弁護士を雇つたのか、それとも自身の演技力が優れていたのか——法廷に出ていない僕には判別がつかない。

撃たれた足の治療と、それよりも重い心的外傷に苦しんでいたからだ。

もつとも、万全の体調であつても、法廷への出席など容易にできることではなかつた——七年が経過した今でも、グレッグ・ブリューの影に怯えているのだから。

「それで——その、グレッグ・ブリューのことなのですが」

コツカーは、そこで言葉を切つた。

いや、少し違う。切らざるを得なかつた。俯いた表情は読みにくいが、数秒、下唇を噛みしめるのが覗きみえる。それも、色が変わるほど強く。

嫌な予感がした。意識の奥底から、耳を塞げという悲鳴が聞こえてくる。鏡面のような心の下に押しこめた、グレッグ・ブリューを恐れる記憶が叫んでいる。

コツカーの告げる事実から目を背ける。さもないと、僕は——

「一週間後、グレッグ・ブリューは『退院』します。……今日は、その報告をしに来ました」

申し訳ありません、というか細いコツカーの声を聞き取ることができたのは、半ば奇蹟だったのだろう。

僕の意識はすでに、朝方に見たテーブルの上に集中していたのだから。

気づけば僕は、すでに居間のテーブルを前にして立ち尽くしていた。

どんな会話をしてコツカーと別れたのか、どんな道順を通つて家まで辿りついたのか、ひどく曖昧だ。知らない間に増えた怪我だの、なくなつたものだのがないことを確認する。

どうやらぼんやり歩いて帰ってきたわけではなく、かといつて全力疾走をしたわけでもなく、可能な限りの早歩きで帰宅を急いだらしかつた。太腿に走つたあとほどでもないがこわばりが残り、妙に気だるい。

そのときの僕の様子など想像したくもないのだが、たいそう必死な顔をしていただろう。

グレッグ・ブリューが外に出る。

それも、あろうことか健常者として。

退院後、やつが人を殺そと殺すまいと関係ない。ただ、平然と生き延びていることが気に食わない——いや、たとえ反省していても気に食わない。反省

するぐらいなら、人殺しなどという大罪なんて犯すべきではないはずだ。救いようのない、人間として最低域のバカだったということのこと。

僕は、反省も、後悔も、懺悔もしない。

金色の実包と、白い紙片が目に入る。

単に「ヴァーチル」という名と電話番号が書かれただけの、名刺とも呼べないメモ用紙の上に転がつた弾丸。薬莢から飛び出した半球は、命を奪うために整えられた金属の一部だ。

手に取つてみると、意外と軽い。弾丸において重要な破壊力は、重さよりも速さで生み出されるのだろうか。

言いようのない存在感を放つていた底部の宝石は、いまもまだぬらぬらと輝いていた。触れても石の感覚しか返つてこないのが、むしろさらに気味悪い。血を含んだ肉の塊のように見えるのに、他の金属部分に引けを取らない硬さを持つている。

湧きあがろうとする恐怖心を飲み込み、僕は椅子に腰かける。手に収まつた実包を見つめ、数秒。すでに腹はくくつている。後戻りするつもりはない。

震える右膝を掴み、実包を握りしめる。

ともすれば覚束なくなる呼吸を整えながら、僕は目を閉じた。

——七年前。

僕は妹の悲鳴を自室で聞いた。

見たくない虫でも出たのか、それともホラー映画でも見ていたのか。そのぐらいにしか思つていなかつたが、いつもと調子の違う母の声も聞こえてきて、何やらただならぬ状況にあるのだろうことは少しづつ理解できた。

そう思うと、にわかに恐ろしくなつた。そろりと椅子から立ち上がり、可能な限り静かに部屋の扉を開けると、忍び足で一人の声のする方向——居間へと向かつた。

会話の内容が分かるようになつてくると、非常事態はすぐさま現実味を増して僕に叩き込まれた。この子だけは、という母の声がした。妹のすすり泣きが聞こえた。聞いたことのない、下卑た笑い声が耳に触つた。

ふと、通り過ぎかけた父の書斎の前で、遺品の拳銃の存在を思い出した。母は嫌つていたから触つたことはない。逆上されて真っ先に撃たれてしまう——という状況が目に浮かんだが、それよりも母と妹を殺されることの方が恐ろしかつた。何もできず、死んでしまうことも。

意を決し、父の書斎へ入つた。ケースのダイヤル錠を合わせ、中に収まつた

リボルバーを手に取った。重い。鉛色の銃身に目を取られながら、見よう見まねで弾を始めた。金属同士の触れ合う、小さな音すらうるさい。震える手で六発装填し、再度、居間へ向かうために廊下に出た。

当てられるのか——余計な思考はすぐさま排除された。考えている暇はない。死ぬかもしれない。ただの勘違いだったら、どれだけいいことか。

願望は裏切られた。ようやくたどり着いたリビングには、知らない男が立っていた。

右手に自動拳銃。銃口には、映画やドラマで見る消音器がついていた。銃声を抑えるものだ。父の銃にはそんなものはついていないし、そもそもリボルバーに消音器はつけられない。銃声を消せる構造ではないからだ。

銃を持った男は、楽しそうだった。終始笑みを浮かべ、脅すように銃口を揺らしていた。母と妹の姿は家具に隠れて見えなかつたが、この状況で平然としているはずもない。

母と妹は、どんな気持ちだろうか。そう思うと、銃を撃つ覚悟はあつさりと固まつた。母と妹を守れ、という父の遺した言葉が、さらに背中を押した。できるだけ壁で体を隠しながら、男を狙つた。鳴らないように歯を食いしばり、両手で銃を構えた。六発の弾丸は込められたものの、きちんと撃てるかどうかは分からぬ。すべてを撃ちきれるのかどうかすら。

撃鉄をおろし、引き金を引いた。

轟音と同時に、僕に大きな衝撃が叩きつけられた。二人の悲鳴が聞こえた。殺せたのだろうか——と思う間もなく、右足から力が抜けて無様に転んだ。痛いというよりも、熱い。撃たれた、と理解することもできない。悲鳴の合間に名を呼ばれた気もしたが、それも聞こえなくなつた。

死ぬんだ、と思つた。

鉄くさい匂いと、花火のあとのような匂いが混ざり合つていた。これが血と硝煙の匂いか、とぼんやりと考えた。男の笑い声しか聞こえない。家具の陰に隠れた惨状を、想像したくもない。

「へタクソだな」

粘りつくような声が鼓膜を叩いた。視線を上げると、男の表情がよく見えた。愉悦に歪んだ顔だ。狙つたはずの頭には傷一つなく、代わりに背後の壁に小さな穴が開いていた。

無性に叫びたかった。目の前の男の頭も、役立たずな自分の頭も、まとめてぶち抜いてやりたかった。

ただ、家族の中でひとり生き延びながら自ら命を絶つのは冒涜だと考える頭ぐらいは、辛うじて残っていた。

この男は、絶対に殺す。

震えることしかできなかつた僕を置いて去ろうとする男に、改めて狙いを定める。リボルバーにはあと五発残つている。殺してやる。

グレッグ・ブリューに狙いを定め、引き金を引く。後頭部に咲いた赤を見とめ——

目を開く。

震える喉をむりやり呼吸に従事させる。握りしめた実包は、さつきよりも重くなつてゐるような気がする。疲れのせいだろうか。底に収まる肉のような石は、あいもかわらずぬめぬめと光つてゐる。

過去を思い出すつもりが、いつの間にか——と言つて差し支えないほど自然に——復讐のイメージを作りあげてしまつた。実際、僕は二発目なんて撃つていない。撃つたとしても、命中しているはずもない。

そもそもあの日、グレッグ・ブリューを殺せていれば、復讐代行なんて頼む必要がない。

これでいいのだろうか。呆然としながら、僕は電話を取る。紙に記された番号をプツシューすると、コール音三回ののちにヴァージルが出る。

「はい、こちら復讐代行」

震えはすでに引いていた。

電話越しに指定された場所へ向かうと、先に到着していたヴァージルが地面に腰かけて待つっていた。

市街地から少し離れた、小高い山の中。鬱蒼と茂る木々の中には直立する、木々よりも高い鉄塔の根本だ。ヴァージルから指定された通り、帽子と手袋を着用してきたのだが、この姿で近づくのは少しばかり怪しいのではないかと思えてくる。

僕に気づき、薄く笑みを浮かべたヴァージルは、ゆつたりと立ち上がりと「立ち入り禁止」の看板を無視して金網の扉を開ける。

遠方にある発電所と、僕の住む町を繋ぐ高圧電線が渡されている鉄塔だ。もちろん、抵抗はある。禁止されているから、というよりも、危険すぎるという意味で。

「大丈夫ですよ。危ないところは適当に処理しましたから」

それとも、と言葉を区切る。

「弾丸だけおいて、引き返しますか？ 仕事の成功は、新聞か、例の警官が教えてくださるでしょう？」

「ヴァージルの進言に、僕は咄嗟に首を振っていた。考えた結果ではない。もう、心に決めておいたことなのだ。」

「——僕が撃つても、グレッグ・ブリューを殺せるだろうか。」

電話で問うた僕に、笑つて肯定したのは他でもないヴァージルだ。

むしろ、その方が成功しやすくなるとまで言われている。射撃が下手なことも伝えたのだが、それこそ一笑にふされた。

ヴァージルに導かれるまま、鉄塔の内側に取り付けられた階段を登る。エレベーターなどという気のきいたものはない。息が切れそだなと、ぼんやり思う。

「自らの手で撃ちたい、ということですので、少し詳しい話をしましようか」長い階段を前に気落ちする様子もなく、営業トークの調子を崩さずにヴァージルが話を始めた。

「あなたはすでに、弾丸に思いを——魂を込めました。その前後で、弾丸の重さは少し変わっていると思います。それが、あなたの込めた魂の重さ。重さによっては必殺の銃弾にも、必ず軽傷しか与えられない銃弾にもなります」

どきりとした。

上着のポケットに収まつた実包を握りしめる。確かに、重くなっている——ような気はする。疲れなどによる錯覚ではなく、実際の重さだったのか。

「次に、魔法銃に球を込めていただきます。通常、復讐代行の依頼者さまにはここまで関わっていただくのですが、あなたは特別に、ここまで来てもらいました」

きつくなってきた呼吸をこまかしつつ、気を紛らわせようと外の景色に目を向ける。

色褪せはじめた緑の中に、ぽつりと白い建物が見えた。かつては感染病患者の隔離施設として使われ、いまは精神病院として精神異常者を隔離・治療している施設だ。

今日、ここから殺人鬼が放たれる。すぐ近くに——と言つても一キロ近くは離れているが——僕の家が含まれる町があるのでから、不安は当然増す。焦りが足を動かすが、前を行くヴァージルに制された。

「まだ時間はあります。ご安心を」

続けて、先ほどの説明を補う。

「魂を込め、弾を込める。より強い魔法を作るためには、意味を重ね、言葉を重ね、思いを重ねる必要があります。銃というものは科学によつて作られたものですが、言葉を重ねるという点においては魔法ととても相性がいい」

胡散臭い話も、疑うつもりになれない。

追い詰められているのだろうか。何にでもすがりたい、という気持ちなら、確かにある。

グレッグ・ブリューを殺す。一週間前、過去を思い出したあの時——ヴァージルの言葉を借りれば、弾に魂を込めたあの時、僕は確かに殺意を抱いた。激しい情動は収まることもなく、むしろ増大して僕の意識の片隅で存在感を放っている。

けれど、その技量は僕はない。ヴァージルの言う「魔法」にすがらなければ、この殺意を満たすことができない——

とまで考えて、恐ろしくなった。

僕は殺人鬼になってしまったのだろうか。

「はい？」

振り返ったヴァージルが、きよとん、と気の抜けた表情をする。

どうやら、声に出てしまつたらしい。隠すつもりもないので、正直に言つてしまふことにした。

話し終えると、ヴァージルの顔にはいつも通りの微笑が戻つていた。

「それは個人に対する殺意でしよう？ いまここで私を殺したい、とかいう考えをお持ちでしたら、それはもう無差別殺人に繋がりかねませんが——あ、失礼。誰にも恨まれていないと断言するには難しい職をしているんでした」

笑いながら言うヴァージルに、なんと返せばいいのか分からなくなつたとき、ちょうど鉄塔の最上部に辿りついた。

足元に気をつけて、というヴァージルの注意を聞きながら、少し開けた足場を踏む。腰までの高さの柵がついているものの、この高さではかなり心もとない。

遠方には森と町、近場に見えるものは金属ばかり——かと思つていたのだが、

足場の隅には登山に使われそうなナップザックと、丸められた寝袋が転がっている。まさか、ヴァージルはここで寝泊まりしていたのだろうか。

「あえて自分の痕跡を残しているんです。依頼主が疑われたら、商売あがつたりなので」

自分が疑われるところを避けるべきなのでは、と思うものの、僕は動機といふ点でグレッグ・ブリュー殺しの第一容疑者になりかねない立場だ。たしかに、僕に関わりのない証拠が出てくるととても助かる。帽子も手袋も、僕の証拠を残さないための指示だったのだろう。

恩を仇で返す、という感覚はどうしても残つてしまうが。

「それでは、銃を」

ヴァージルが懐から銃を取り出し、グリップをこちらに向けて差し出してきた。

黄金色のアンティーク銃だ。ガラスケースに守られていないのが不思議なくらいの装飾は健在。改めて見ると、弾丸を込めるのも、引き金を引くのもためらわれるくらいの美しさだった。

恐る恐る、グリップを握る。ヴァージルから僕に手渡された銃は、ずしりと重い。

「あ、込める前に、弾丸をこちらに」

言われるまま、ヴァージルが持つ白布の上に実包を乗せる。

おや、と彼の口からこぼれた声は、その重さに対するものだろうか。布の中で実包を揉むように拭くヴァージルが、感想を述べる。

「いい重さです。うまくいきますよ」

言いながら実包の指紋を拭き取るヴァージルの表情は、どこまでも優しかった。

やはり、復讐代行などという物騒な稼業は似合わない。その差異が不気味さを増すのだが、ヴァージルの表情には人を安心させる力があるようだ。最初に彼から説明を受けたあと、グレッグ・ブリューに恐怖心を抱いたのは、ヴァージルのことを見ていなかつたからなのかもしれない。

考えすぎだらうか。

「どうぞ」

短く言つて、ヴァージルは白布を広げた。まつさらになつた実包が差し出される。

注意深く、掴む。ヴァージルの言葉に従い、片隅でうずく殺意を意識しながら

ら弾を始めた。
魂を込める。

普通の銃であつても、復讐のためであればそのぐらいのことはおのずとしてしまうだろう。ただの精神論ではない。儀式のようなものだ。

ヴァージルに促され、白い建物の方へ目を向ける。遠すぎてよく見えないが、辛うじて人が玄関から出てきたことを見とめることができた。

「見えなくとも問題はありませんが、必要であればこれを」

言葉と同時、横から双眼鏡が差し出される。銃を持たない左手で受け取り、覗き込む。拡大された視界がぐらぐらと揺れるのを抑えながら、どうにかしてピントを合わせ、精神病院の敷地内へ向ける。

数人の職員に伴われて歩く男に目がとまる。

忘れもしない、あの顔だ。薄気味悪い笑みは浮かべていないものの、見間違えるはずもない。

グレッグ・ブリュー。

ここ一週間、何度この名を思い出しだらうか。七年間、ずっと避け続けた忌み名を、意識の内だけとはいえこれだけ呼んだのは初めてのことだ。

知らず、右腕が持ち上がった。手の内でアンティーケ銃が存在感を増す。向けられるべき場所に向けられた銃口が、その喜びをグリップ越しに伝えてくるような気さえした。

左手に双眼鏡、右手に銃という変則的な構えでりながら、外れる予感が少しもない。

どころか、周囲に立つ人を巻き込む可能性すら、意識から消え去っている。

——復讐を代行するのは、私ではなく弾丸です。

——そこに込められた思いが本物であれば、弾丸は望み通りにすべてを代行してくれる。

ヴァージルの言葉が、脳裏にひらめく。

引き金にかかつた指に、迷いはなかつた。

轟音と、衝撃。火薬の匂いが鼻に刺さる。

あおられて大きく揺れた視界の中で、グレッグ・ブリューの頭に花が咲くのが見えた。

ひどく現実味がなかつた。

薄い新聞紙に目を落とすと、何度も同じ見出しが躍つてゐる。

——退院のグレッグ・ブリューが殺害される

——潰れていない弾丸の謎

細々とした文字で書かれた本文を見れば、これは新聞記事というよりも、うさんくさい週刊誌の都市伝説特集に似た雰囲氣があつた。

狙撃位置は現場から離れた鉄塔の上とされているが、残された弾丸は拳銃に使用するもの。通常、命中すれば潰れる弾丸が、薬莢から飛び出したままの姿で発見される。近くにいた職人三名にけがはなし——

僕が引き金を引いた事件だというのに、読んでいるだけで苦笑が浮かんでくる。実際、同じ事件を伝えた報道機関には、問い合わせが殺到しているらしい。伝え聞いた話では、近く警察が直々に正式発表をする事態にまで発展しているようだつた。

大変そうだ、と他人事のように思う。

それを言つたら、ある程度の証拠は残してしまつてゐるであろうヴァージルも、大変なのだろうが。

「お待たせしました」

意識を向けた途端、穏やかな口調が耳に滑り込んできた。

いつもの微笑を浮かべたヴァージルが、向かいの席に座る。僕は広げた新聞紙をたたみ、ヴァージルがウェイターに注文するのを待つて鞄を取り出した。僕の家からそう離れていない、オープンカフェ。そこが、ヴァージルの指定した報酬支払いの場所だつた。

取り出した封筒は、自分でも驚くほどに薄い。ヴァージルが提示した金額は、学生が一ヶ月もバイトすれば集まる程度のものだつたのだ。

驚きよりも、申し訳ないという気持ちが大きい。しかし、本当にそれでいいのかと問う僕に、「趣味みたいなものですから」と笑つて答えたヴァージルには有無を言わせない力があつた。

真意は読めない。知りたいとは思うのだが、問いただす氣にもなれない。

「ああ、ぴつたりですね。ありがとうございます」

封筒の中身を数え終わつたヴァージルが、視線を上げた。

薄い茶封筒がヴァージルの懷に入ると同時に、ちょうどよく頼んでいたコーヒ

ーが運ばれてくる。ウェイターが去ったあと、ヴァージルはどうしてだか困つたような顔をした。

「これに毎回困つてしまうんですね。支払いが終わつたら、すぐに帰ろうと思ふんですけれど」

なぜ、と問う必要もない。

ヴァージルは、できるだけ依頼人と関わらないようにしている。狙撃地点に証拠が残るよう、鉄塔の上で寝泊まりしていたのと同じだ。

犯人は自分である、と大声で主張するのではない。依頼人が犯人だと疑われないよう、できる限りのことをしている印象だ。

やはり、被虐趣味に見える。復讐代行と名乗つて家を周り、仕事が入れば殺人の罪を被り、しかも報酬は驚くほど少ない。これで「趣味」と言い張るなど、第一印象よりもよほど変質者だ。

なにか目的があるのではないか。

何気なく問うと、ヴァージルは少し考えてから肩をすくめ、コーヒーを口に含んだ。

「面白くない話ですよ」

そう断つて、服の下に隠していたペンダントを外した。金具を取り付けられた実包がぶら下がっている。底には、あの肉塊のように光る石がはめ込んであつた。

テーブルの上に置くと、ごとごとと鈍い音がする。

見た目よりも重い——魂が込められた弾丸だと、想像するのはたやすい。「ある男を追っています」

普段の調子を保つて、ヴァージルが言つた。

実包から、彼の目へ視線をそらした。細められた目が、柔らかい微笑の中にあつて刃のよう銳い。

「だから、私のことは忘れてください。誰かに問われても、なにも答えないでください」

続いた言葉を、思わず聞き返してしまつた。

自分の存在を相手に知らせたくて、少ない依頼料の代わりに依頼人を「廣告塔」にするつもりだと思っていた。だというのに、忘れるだなんて。

逆に言えば、そのぐらいのことは喜んでやろうと思っていた。しかし、ヴァージルは静かに首を振る。ペンダントを首にかけて服の下に隠し、布越しに実包を握りしめる。

そうやつて、どれだけの時間を弾丸に込めてきたのだろうか。
数瞬伏せられた目が、上がる。顔には微笑が浮かんでいるのに、神経を削ら
れるような恐怖心が湧きあがる。

半分ほど残ったコーヒーを置いたまま、ヴァージルは席を立つ。
去り際、囁かれた言葉を噛みしめて、僕はようやく彼に関わったことの重大
さを理解した。

「——復讐の理由を、これ以上増やしたくないので」

〈了〉